平成14年度厚生労働科学研究費補助金
エ イ ズ 対 策 研 究 事 業

エイズに関する普及啓発における非政府組織（ＮＧＯ）の活用に関する研究

同性愛者等への普及啓発に関する研究

研 究 報 告 書

平成15（2003）年３月

主任研究者　大石　敏寛
特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会

同性愛者等への普及啓発に関する研究班

平成14年度・班員構成

【主任研究者】		
大石　敏寛（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）		
【班員構成】		
氏名	担当項目	所属
宮内　典子	1-3	特定非営利活動法人　レッドリボンさっぽろ
冨田美奈子	1-3	特定非営利活動法人　レッドリボンさっぽろ
鈴木　賢	1-3	北海道セクシュアルマイノリティ協会　札幌ミーティング
嶋田　憲司	2	せかんどかみんぐあうと
風間　孝	1-3	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
柏崎　正雄	1-3	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
菅原　智雄	1-3	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
太田　昌二	2	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
新美　広	2	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
鳩貝　啓美	2	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
野崎　真治	2	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
宮近　敬三	2	特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
河口　和也	1-3	広島修道大学
木村　秀和	1-3	プログレス松山

目　次

Ⅰ．総括研究報告書

エイズに関する普及啓発における非政府組織（ＮＧＯ）の活用に関する研究
（同性愛者等への普及啓発に関する研究班）…… 11

Ⅱ．分担研究報告書

研究１：同性愛者等への普及啓発におけるＮＧＯ連携モデルの構築に関する研究…… 25

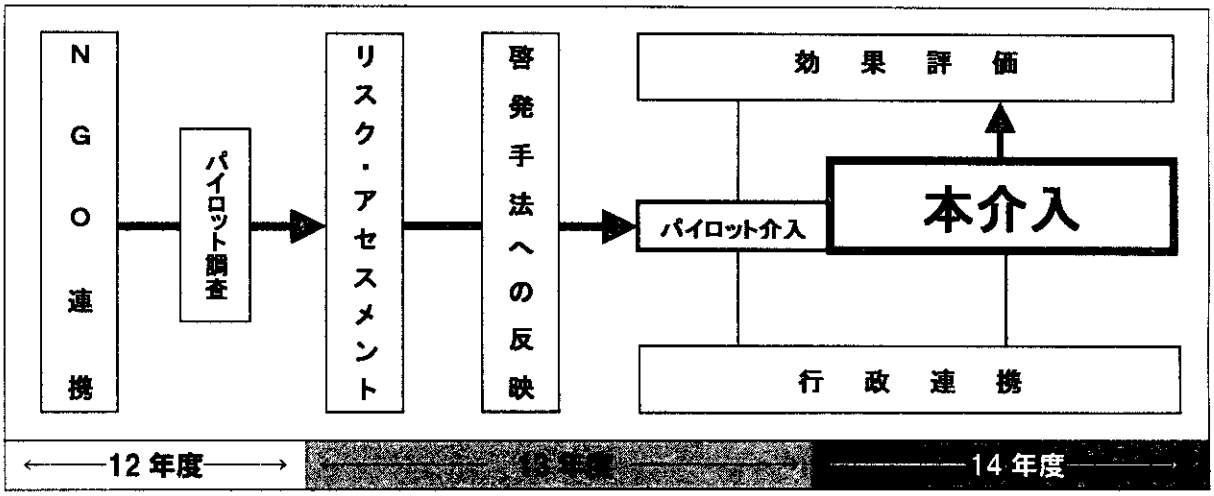
研究２：同性愛者等への HIV／STD 予防啓発手法に関する研究…… 39
（添付資料）「個人レベル」啓発介入プログラム事例－セルフ・チェック・シートＷＥＢ版
（添付資料）「小グループ・レベル」啓発介入プログラム事例－LIFEGUARD2002-2003
（添付資料）「コミュニティ・レベル」啓発介入プログラム事例①－Brush Up! Safer Sex
（添付資料）「コミュニティ・レベル」啓発介入プログラム事例②－コミック企画広告

研究３：同性愛者等への HIV／STD 予防啓発介入のプログラム評価に関する研究…… 95
（添付資料）LIFEGUARD2002-2003（ワークショップ）効果評価質問票

研究成果の刊行に関する一覧表…… 127

Ⅰ．総括研究報告書

エイズに関する普及啓発における
非政府組織（NGO）の活用に関する研究
（同性愛者等への普及啓発に関する研究班）



厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）

総括研究報告書

研究課題：エイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究
（同性愛者等への普及啓発に関する研究）

課題番号：H－１２－エイズ－０１７

主任研究者：大石敏寛（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）

分担研究者：柏崎正雄（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
菅原智雄（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
河口和也（広島修道大学）

研究要旨

本研究の目的は、日本における男性同性愛者のHIV感染リスク規定要因に基づき開発された予防啓発介入プログラムを評価するとともに、NGO間の連携およびNGOと行政の連携による実践的試みを通して、NGOを活用した普及啓発を行う上での課題を克服するモデルを提示することにある。

本年度は、H13年度に実施した男性同性愛者のHIV感染リスクの要因を体系的に査定するリスク・アセスメント調査を踏まえ、「個人レベル」「小グループ・レベル」「コミュニティ・レベル」の定型３類に則り予防啓発手法を開発し、札幌、東京近郊、松山の３地域で実施されたプログラムの評価を行った。

３地域において本介入を実施するうえでは、３年間を通してその実施母体となった各地域のNGO間のネットワーク（プロジェクトOURS）が、介入手法の開発・実施、効果評価、行政との連携を共同で担う役割を果たした。

予防啓発手法の開発にあたっては、個人レベルにおいて、STD情報ライン（電話相談）、STD情報ページ（ホームページ）を継続するとともに、新規にセルフ・チェック・シートを開発し、インターネットやパンフレットに掲載した。小グループ・レベルにおいては、ワークショップ型介入プログラム（LIFEGUARD）を開発し、今回の本介入で最も重要な啓発領域とされた「主張スキル」を正面から扱った。コミュニティ・レベルでは、３地域ごとの情報を加味した情報パンフレットを配布した。また、全国メディアであるゲイ雑誌を活用し、３地域を含む全国にコミックのストーリー表現を軸とする「周囲規範」および「主張スキル」のアドバイスを発信した。

プログラムの評価では、個人レベル介入におけるSTD情報ラインおよびSTD情報ページの評価から、男性間の性行為およびそれに起因する症状に対応できる情報の蓄積と相談・医療機関への紹介体制を準備することの必要性が明らかになった。小グループ・レベルの介入では、知識、セイファーセックスのイメージ、リスクを回避するスキルの認知およびリスクを避けられるという自己効力感のいずれにおいても、介入による効果がフォローテスト（1ヵ月後）まで持続したことが確認された。以上の結果を踏まえ、性行動においても１ヵ月後のリスク行動の減少が明らかになった。以上からリスク・アセスメントにもとづいて開発され

たワークショップ型の介入の有効性が確認されたといえる。コミュニティ・レベルの介入では、男性同性間のHIV感染リスクに特化した情報提供、啓発表現としてのコミック手法の採用、地域差や性行動様式を踏まえた啓発メッセージの必要性が、質的手法にもとづく評価により明らかになった。

以上を踏まえ、本研究におけるNGO連携ーリスク・アセスメントー介入実施・効果評価という一連のプロセスを、他地域においても実践可能な男性同性愛者向けのエイズ予防啓発介入モデルとして提示した。

A. 研究目的

日本における男性同性愛者のHIV感染リスク規定要因を明らかにし、その結果に基づき予防啓発介入の手法を開発・実施し、その啓発効果を評価する。さらに、予防啓発介入を実施した札幌、東京近郊、松山の3地域においてNGO間の連携およびNGOと行政の連携による実践的試みを通して、NGOを活用した普及啓発を行う上での課題を克服するモデルを提示する。

以上の目的を達成するため、本年度は、NGO連携、予防啓発手法、プログラム評価に関する研究を実施した。

B. 研究方法

(1)NGO連携

ネットワーク構築（H12年度）を踏まえ、H13年度に実施された札幌、仙台、東京、松山の4地域でリスク・アセスメント調査にもとづき開発された介入プログラムをNGO間およびNGO－行政の連携により、H14年度に札幌、松山、東京の3地域で実施した。そのさい、拡大支援型として位置づけた札幌にはNGOへの方法論の提供・啓発における連携を、新規開拓型として位置づけた松山には当事者団体へのサポートを含めた連携を行った。この取り組みにおいて、NGO連携の経過を記録し、NGOを活用した普及啓発の成果と課題を整理した。

(2)予防啓発手法

リスク・アセスメントによって規定された要因を啓発介入領域とし、要因毎の啓発目的を整理した。さらにそれぞれの啓発領域に適合する啓発形態を検討した。それらの啓発形態を欧米におけるHIV予防啓発介入において定型となっている「個人レベル」「小グループ・レベル」「コミュニティ・レベル」の3類型から再度検討し（表1）、最終的に個人レベルとしてSTD情報ライン（電話相談）、STD情報ページ（ホームページ）、自己チェックシートを、小グループ・レベルとしてワークショップ（LIFEGUARD）を、コミュニティ・レベルとして情報パンフレット、メディア広告を開発した。

(3)予防啓発介入のプログラム評価

介入の評価を行うにあたっては、プログラムの改善点を明らかにするための形態評価と介入の効果測定を行うための影響評価の2つのアプローチを採用した。

個人レベルの介入では、STD情報ラインに対しH13年3月～H15年3月の間に相談のあった646件を対象に実施記録を分析し、STD情報ページに対しH15年1～3月にかけてホームページ上でのアンケート回答のあった280名を対象に分析を行うことで、それぞれの形態評価を行った。

小グループ・レベルの介入では、プログラムの形態評価とプログラムの影響評価を実施した。影響評価は、予防介入を行う際に定めた目

的の達成度を測定することによって実施した。具体的には、H14年9月～H15年2月にかけて実施された予防介入プログラムLIFEGUARD2002-2003の参加者に対し、開始前（プレ）、終了直後（ポスト）、1ヵ月後（フォローアップ）の3回にわたってアンケート調査を行った。

コミュニティ・レベルの介入では、情報パンフレットの普及およびメディア・キャンペーン終了後に札幌、東京、松山の3地域でフォーカス・グループ・インタビューを実施（計24名）し、質的手法によってコミュニティでの受け止められかた（イメージ、対象、内容、設定等）を評価した。

C. 研究結果

(1)NGO連携

ネットワーク（プロジェクトOURS）の構築（H12年度）、リスク・アセスメント調査および介入環境の整備のためのコミュニティ・エンパワメントの実施（H13年度）を踏まえ、H14年度は3地域（札幌、東京近郊、松山）でNGO間およびNGO－行政間の連携のもと本介入を実施した。NGOの相互連携による取り組みとしては、介入プログラムの立案、パンフレット・広告の製作、ワークショップの準備・実施、ボランティア・リクルート、アウトリーチ、成果発表会、効果評価のためのグループ・インタビュー等を実施した。具体的には、H14年1～6月は「本介入プログラムの開発期」と位置付け、地域の固有性を踏まえた啓発方法、プログラムおよび情報提供の内容、行政との連携のあり方を検討した。同年6～12月は「本介入プログラムの準備・実施期」と位置付け、情報パンフレットおよび地域メディア広告の製作、行政との連携、ボランティア・リクルート、コミュニティ・アウトリーチの実施、ワークショップの準備・実施を行った。H15年1～3月は、「本介入プログラムのフォローアップ期」と位置付け、本介入の効果評価を行うためのフォーカス・グループ・インタビューの準備・実施、成果発表会の準備・実施に取り組んだ。

(2)予防啓発手法

H13度実施されたリスク・アセスメント調査結果を反映した予防啓発手法の研究開発を引き続き行った。具体的には、3年間の研究計画における「本介入」の実施時期にあたることから、H13度一部パイロット開発をした啓発手法に改良を加え、本介入として「個人レベル」「小グループ・レベル」「コミュニティ・レベル」の3類型すべてを組み合わせた全体計画を立案した（表2）。計画は、対象地域の札幌、東京近郊、松山の3地域においてすべてH14年度中に実行した。

①個人レベルの介入

電話相談、ホームページによる情報提供は、H13年度からの継続とし、本介入の中でのさまざまな実験的な試みと相乗的に補完し合う役割を担った。自己チェック・シートは、昨年度のパイロット版をもとに、札幌版、関東版、松山版を完成させ、インターネットやパンフレットに掲載した。インターネット上では、1,455人が利用しており、気軽にゲーム感覚で試せるようなものとなった。

②小グループ・レベルの介入

LIFEGUARD2002-2003は、小グループ・レベルの啓発プログラムとして、H13年度にパイロット版を開発・実施したものを本介入用に改良・実施した。本介入を実施したH14年度は、札幌、東京近郊、松山で各4回ずつ計12回開催し、256人の参加を得た。1回あたりの参加者数は21.3人であり、プログラムの運営上の適性規模（20人）とほぼ等しかった。

参加型のワークショップ形式のセミナーとし、リスク・アセスメント調査結果にもとづき、小グループ・レベルに適した啓発介入領域を扱

い、構造化されたワークショップを目指した。

参加者が地域コミュニティ内の友人にセイファーセックスを伝えるコア層となることを狙いとして、ワークショップ形式という参加型形態を生かし、「主張スキル」を身につけるための企画を中心に構成した（表３）。

プログラム具体的な内容は以下のとおりである。

a)開始時　プログラム評価のためのアンケート「プレ・テスト」を実施する。

b)１部:導入

参加者間でのアイス・ブレーキング（打ち解けあい）を目的として、参加者間で自己紹介を行う。

c)２部:HIV の基礎知識

「HIV 感染のしくみ」「感染経路」「同性間でのリスク行為の確認」「予防方法」についてレクチャーを行う。

d)３部:コンドームについての態度変容

コンドームイメージの改善に役立つ特徴を持ち、ゲイにとって実用的な９種類のコンドームを展示紹介し、実物に触れてもらう。さらに、それらのコンドームについて人気投票を行う。

e)４部:セイファーセックスのバリエーションの開発・提案

自分が性的に感じる身体部位とそこに相手にしてもらいたい行為（Sex バリエーション）を出し合い、各々のリスクと予防方法を全員で検討する。

f)５部:セイファーセックス・スキルを共有するケース・スタディ

男性間のセックスを前提に、予防行動の際に直面する 12 の場面設定を用意し、それについての対処法を出し合う。別途行ったフォーカス・グループ・インタビュー（FGI）で収集されたテクニックをスタッフが追加紹介する方式をとったほか、最後にこれらを全て記載した資料を配布する。

g)終了時

コンドーム・ランキングの人気投票結果を知らせ、参加者には気に入ったコンドームと啓発冊子を含む情報キットを無料で提供する。プログラム評価のための「ポスト・テスト」の実施および「フォローアップ・テスト」（１ヵ月後調査）の登録を行う。

③コミュニティ・レベルの介入

情報パンフレット（Brush Up! Safer Sex）は、地域別のリスク要因に対応させ、横浜版、松山版、札幌版を開発し、９月から 12 月のワークショップ開催期間に併せて配布した。

またメディア広告は、リスク・アセスメント調査結果における地域別リスク要因のうち、各地域とも共通の要因であった「主張スキル」「周囲規範」を普及させるために「コミック」と「スキルアドバイス」を組み合わせた手法を採用した。テーマは「８月：アナル・セックスでのリスク軽減」「９月：オーラル・セックスでのリスク軽減」「10 月：複数プレーでの意思表示のスキル」「11 月：相手の魅力への弱さへの対処」の４種類である。それらを、チラシ、ポスター、全国規模の雑誌広告、インターネットに４ヶ月間の連続キャンペーンとして実施した。

(3)プログラム評価

①個人レベルの介入

a)STD 情報ライン

実施記録の集計から、主な利用者（相談者）は関東・近畿に住む 20～34 歳の男性同性愛者であることが明らかになった。また、電話をかけやすい曜日は土曜、日曜であった。相談内容では、行為においては男性間のオーラルセックス、アナルセックス、症状においてはペニス、アナルが多数を占め、治療・検査関係では病院の選び方が高い割合であった。

b)STD 情報ページ

アンケート集計から相談者は関東・近畿・中部に住む 10～30 代の男性同性愛・両性愛者であることが明らかになった。ページを開いた理由として STD の症状および予防方法を知りたいが挙げられており、知りたかった疾病としてはHIV、梅毒、B 型肝炎が上位を占めた。ホームページの使いやすさでは９割が（とても）使いやすいと回答し、STD の知識が増えたかとの問いには(とても)増えたが８割以上であった。ゲイ向けの情報であることについては（とても）役立ったが９割を上回った。さらに、ホームページを開いた目的の達成度では、達成したが８割以上であった。

②小グループ・レベル(LIFEGUARD)の介入

a)形態評価　プログラムで扱った情報量に対しては「ちょうどよい」と答えた参加者が８割、情報の質については「知っているものと知らないものがあった」が７割で、プログラム内で「役立つリスク回避のテクニックがあった」と答えたものは５～６割であった。また「他の参加者の工夫や経験から参考になることがあった」は９割を超え、「イベントで取り上げられたエイズの話題を友だちに知らせたい」と答えたものは８割を上回った。

b)影響評価（表４）

a)知識　感染体液の知識では、プレテストと比べフォローアップテスト（１ヵ月後）で正答が有意に増加したのは、「血液」($p<0.01$)、「膣分泌液」($p<0.001$)、「だ液」($p<0.01$)、「精液」($p<0.05$)であった。感染身体部位の知識では、プレテストと比べフォローテストで正答が有意に増加したのは「尿道」($p<0.001$)「亀頭」($p<0.05$)であった。感染行為についての知識では、「ディープキス」「コンドームをつけずにペニスをなめる」の正答が、プレテストと比べフォローアップテストにおいて有意($p<0.001$)に増加した。

b)イメージ　セイファーセックスおよびコンドーム・イメージの向上では、フォローアップテストで２項目「セイファーセックスは気持ちよい」($p<0.05$)、「セイファーセックスはやりかたが決まっていない」($p<0.001$)が有意に増加し、「コンドームを使ったセックスはＨな感じがする」の増加割合は有意傾向($p<0.1$)であった。

c)スキル　セイファーセックス・スキルの認知では、「フェラチオでHIV 感染を避ける方法を知っている」「相手のコンドームなしのアナルセックスを止める方法を知っている」がプレテストと比べフォローアップテストにおいていずれも有意($p<0.001$)に増加した。

d)自己効力感　リスク行為を避けられるという自己効力感は、フォローアップテストで「アナルセックスの時にコンドームを使うことができる」が有意($p<0.01$)に増加し、「相手の口内射精を避けることができる」の増加割合は有意傾向($p<0.1$)であった。

e)性行動　性行動では、プレテストと比べフォローアップ・テストで４項目すべてにおいてリスク行動が有意に減少した。有意差は、「口内射精をした」($p<0.001$)、「口内射精をされた」($p<0.001$)、「アナルにペニスを入れるときコンドームを使わなかった」($p<0.005$)、(「アナルにペニスを入れられるときコンドームを使わなかった」($p<0.01$) であった。

③コミュニティ・レベルの介入

a)情報パンフレットについて

全体的なデザインは、カラー刷りおよびコミックを用いたことにより読みやすいとの評価を得ることができたが、反対に文字が中心となった裏面は読みにくいとの意見があった。男性同性間の HIV 感染リスクに特化した情報提供に関しては、必要な情報が入手できる点が評価された。情報伝達に関して、コミックを用いた

点については概ね好評であったが、コミックの設定に対してはリアリティの感じ方で評価が二分した。セルフ・チェック・シートに対しては、自身の性行動をとらえかえす契機となったとの意見が寄せられた一方で、利用しにくいとの指摘があり、どのような方式・形式を採用するかについては今後の課題となった。地域版の発行に関しては、エイズを自分たちのコミュニティの問題として認識する契機になるとの意見が出された。

b)メディア広告について

コミックを用いた点については、概ね好評であった。スキルの提供に関するテーマ設定については、基本的で必要な情報であるとの評価があった一方で、各々の場面設定についての意見では、読み手の居住地の違い、または性経験や嗜好の違いによってリアリティの感じ方、受けとめかたに格差が生じていた。

D. 考察

(1)NGO 連携

①NGO 連携の成果

前年度のリスク・アセスメント調査で明らかになったリスク要因を実際の男性同性愛者向けプログラムに反映させるための介入手法の開発および実施、介入プログラムの効果評価、成果発表を共同で担えたことがあげられる。

②NGO 連携の課題

啓発介入における各地の現場での担い手の重要性である。流動性の高い各地のコミュニティの人的資源の事情を鑑み、介入プログラム実施までの準備段階で、新しいボランティアのリクルートやスタッフの動機付けのため、数種のプログラムの準備が必要であることが確認された。

(2)予防啓発手法

①本介入全体について

電話相談、ホームページによる情報提供、セルフチェック・シート、ワークショップ(LIFEGUARD)、パンフレット(Brush Up! Safer Sex)、メディア広告の６つの介入プログラムの中で、電話相談、ホームページを恒常的な情報アクセスを可能とする基本的な設定とし、他の４つを影響評価を見る実験的な啓発手法と設定した。

②介入手法について

個人レベルにおいて、セルフ・チェック・シートを開発し、インターネットやパンフレットに掲載した。チェック・シートの目的として、自分のリスク状況を振り返ることや行動変容の意図を持つ契機となることを目的とした。

小グループ・レベルにおけるワークショップは、今回の本介入で、最も重要な啓発領域とされた「主張スキル」を正面から扱えるプログラムであった。そのため、一方的な講義スタイルではなく、参加者間の相互作用を上手く生かし、イラスト・パネルを使用するなどエンターテインメント色も加味したプログラムとして立案した。ワークショップが直接与える影響は１回あたり 20 人前後であったが、この参加者が地域コミュニティ内の友人にセイファーセックスを伝えるコア層となることを狙った。

コミュニティ・レベルでは、まず３つの地域で、地域の情報を加味した情報パンフレットを配布した。普及にあたっては、作業量を都市規模に合わせて配分することが今後の課題として残った。ゲイ雑誌に掲載したメディア広告については、既存の商業システムの流通を活用し、今回の３つの対象地域を含む全国に発信した。今回の４回シリーズの啓発広告は、コミックのストーリー表現を軸に「主張スキル」を提案し

た。万人向けキャッチフレーズの呼び掛けや、あいまいなイメージのみのエイズ・ポスターが多い中で、「予防啓発」を正面から捉え、企画化を試みた事例となった。

③3つの対象地域について

札幌および松山に関しては、これまで男性同性愛者等を対象とした本格的なエイズ予防啓発が行われてこなかったこともあり、今回のプロジェクト OURS による啓発介入が、特に大きな意味をもったと考える。東京近郊（関東）の大都市圏に関しては、作業量の点で介入における一定の限界があった。地域内でのコミュニティ規模での介入効果を把握するには、別途、大都市圏における量的な普及そのものに関する方法論の研究が必要と考えられる。

(3)プログラム評価

①個人レベルの介入

STD 情報ラインでは、男性間の性行為およびそれに起因する症状・疾病に対応できる相談・医療機関への紹介ニーズの高いことが明らかになった。STD 情報ページでは、ゲイ向けの HIV／STD 情報を提供したことに対し高い満足度が示された。以上から、男性間の性行為およびそれに起因する症状に対応できる情報の蓄積と相談・医療機関への紹介体制を準備することの必要性が明らかになった。

②小グループ・レベルの介入

形態評価では、プログラムにおいて扱われた情報量は適切であり、また内容の質、とりわけリスク回避のスキルについては、参加者にとって有益な内容になっていることが示された。影響評価では、体液、身体部位、感染行為において知識の上昇をみた。セイファーセックスおよびコンドームに対するイメージ、リスクを回避するスキルの認知およびリスクを避けられるという自己効力感においても、介入による効果がフォローテストまで持続したことが確認された。以上の結果を踏まえ、性行動においても、目的として設定した全４項目においてリスク行動の減少が確認された。以上からリスク・アセスメントにもとづいて開発されたワークショップ型の介入の有効性が確認されたといえる。今後は、フォローアップ調査協力者を増加させる方法および介入の影響が 1 ヶ月以降どの程度継続するかを評価するための調査方法論が課題である。

③コミュニティ・レベルの介入

情報パンフレットに対しては、男性同性間の HIV 感染リスクに特化した情報提供および地域版の発行によってエイズを自分たちのコミュニティの問題として認識する契機になる点が確認された。またメディア広告では、コミックを用いることが有効な媒体となりうることが確認できた一方で、その場面設定に対しては地域差や性行動の様式により生じる差異を反映することの必要性が明らかになった。

E. 結論

H13 年度に実施した男性同性愛者の HIV 感染リスクの要因を体系的に査定するリスク・アセスメント調査を踏まえ、本年度は共通の介入領域を設定した上で、地域別に違いのある固有の領域を加えた地域毎の介入計画を立案し、各地域で「個人レベル」「小グループ・レベル」「コミュニティ・レベル」の定型３類に則り一定規模の本介入を実施した。

３地域において本介入を実施するうえでは、３年間を通してその実施母体となった各地域の NGO 間のネットワーク（プロジェクト OURS）が、介入手法の開発・実施、効果評価、行政との連携を共同で担う役割を果たした。

予防啓発手法の開発にあたっては、個人レベルにおいて、STD 情報ライン（電話相談）、STD

情報ページ（ホームページ）を継続するとともに、新規にセルフ・チェック・シートを開発し、インターネットやパンフレットに掲載した。小グループ・レベルにおいては、ワークショップ型介入プログラム（LIFEGUARD）を開発し、今回の本介入で最も重要な啓発領域とされた「主張スキル」を正面から扱った。コミュニティ・レベルでは、3地域ごとの情報を加味した情報パンフレットを配布した。また、全国メディアであるゲイ雑誌を活用し、3地域を含む全国にコミックのストーリー表現を軸とする「周囲規範」および「主張スキル」のアドバイスを発信した。

プログラムの評価では、個人レベル介入におけるSTD情報ラインおよびSTD情報ページの評価から、男性間の性行為およびそれに起因する症状に対応できる情報の蓄積と相談・医療機関への紹介体制を準備することの必要性が明らかになった。小グループ・レベルの介入では、知識、セイファーセックスのイメージ、リスクを回避するスキルの認知およびリスクを避けられるという自己効力感のいずれにおいても、介入による効果がフォローテスト（1ヵ月後）まで持続したことが確認された。これらの結果を踏まえ、性行動においても1ヵ月後のリスク行動の減少が明らかになった。以上からリスク・アセスメントにもとづいて開発されたワークショップ型の介入の有効性が確認されたといえる。コミュニティ・レベルの介入では、男性同性間の HIV 感染リスクに特化した情報提供、啓発表現としてのコミック手法の採用、地域差や性行動様式を踏まえた啓発メッセージの必要性が、質的手法にもとづく評価により明らかになった。

以上を踏まえ、本研究におけるNGO連携－リスク・アセスメント－介入実施・効果評価という一連のプロセスを、他地域においても実践可能な男性同性愛者向けのエイズ予防啓発介入モデルとして提示した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

【論文】

Takashi KAZAMA, Kazuya KAWAGUCHI 2003 "HIV Risk and the (Im)permeability of the Male Body: Representations and Realities of Gay men in Japan" Roberson, James and Suzuki Nobue ed., *Men and Masculinities in Contemporary Japan,* Routledge Curzon, 180-197

風間孝 2003 「介入の場としてのゲイ・ポルノグラフィ」『女性学』Vol.10. 日本女性学会.

風間孝 2003 「生－権力と死――エイズの時代における男性同性愛者の表象をめぐって」『解放社会学研究 17』. 日本解放社会学会. 33－58.

【学会発表】

大石敏寛・風間孝 2002 「学校現場におけるHIV感染者、エイズ患者の人権教育に関する研究」（第 61 回日本公衆衛生学会総会 口演発表）

大石敏寛・風間孝 2002 「学校現場における HIV 感染者／エイズ患者の人権教育に関する研究」（第 16 回日本エイズ学会総会 口演発表）

風間孝 2002 「HIV感染リスクの構築と侵入（不）可能性――エイズにおける男性同性愛と外国人女性の表象――」口演発表（第18回日本解放社会学会 口演発表）

風間孝　2002　「ゲイ・ポルノグラフィー試論——男性同性愛のエイズにおける表象を中心に——」大会シンポジウム報告（2002 年日本女性学会　シンポジウム発表）

Takashi KAZAMA, Kazuya KAWAGUCHI, Masao KASHIWAZAKI, Tomoo SUGAWARA, Kumiko KANEKO, Ken SUZUKI, Hidekazu KIMURA 2002 "Four Major Areas Identified Through the Risk Assessment Analysis: Towards the Intervention Among Gay Community in Japan" (The 14th International AIDS Conference)

風間孝・大石敏寛・河口和也　2002　「男性同性愛者等におけるリスクアセスメント調査」（第 61 回日本公衆衛生学会総会　口演発表）

風間孝・河口和也・菅原智雄・柏崎正雄・宮内典子　2002　「男性同性愛者等におけるリスクアセスメント調査」（第 16 回日本エイズ学会総会　口演発表）

Masao KASHIWAZAKI, Tomoo SUGAWARA, Takashi KAZAMA, Kazuya KAWAGUCHI, Kenji SHIMADA, Kumiko KANEKO, Ken SUZUKI, Koji KOHAMA, Hidekazu KIMURA, Shuji TOKUHARA 2002 "Project OURS (5 cities' gay NGO-Community collaboration): Empowering Local Communities for Intervention among Gay/Bisexual Men in Japan" (The 14th International AIDS Conference)

河口和也・風間孝・大石敏寛　2002　「ゲイ、バイセクシュアル男性のエイズ予防に向けたリスク構成要因」口演発表（第 61 回日本公衆衛生学会総会　示説発表）

河口和也・風間孝・菅原智雄・柏崎正雄・宮内典子　2002「ゲイ、バイセクシュアル男性のエイズ予防に向けたリスク構成要因」（第 16 回日本エイズ学会総会　口演発表）

Kazuya KAWAGUCHI, Takashi KAZAMA, Masao KASHIWAZAKI, Tomoo SUGAWARA, Kumiko KANEKO, Ken SUZUKI, Hidekazu KIMURA 2002 "Some Findings Through Focus Group Interview in Three Japanese Cities: Risk Assessment for AIDS Prevention Among Gay and Bisexual in Japan" (The 14th International AIDS Conference)

H. 知的所有権の出願

なし

表1 定型3類型毎の啓発領域の目標設定

		本介入に採用した啓発形態		
		自己チェック・シート，電話相談，情報提供ホームページ	ワークショップ	情報パンフレット，メディア「広告」
記号	**目標とする介入領域**	**個人レベル**	**小グループ・レベル**	**コミュニティ・レベル**
ア	知識	○	○	○
ク	行動変容意図	○	○	○
コ	魅力・快感		○	○
セ	周囲規範		○	○
ト，ナ	主張スキル		○	○
ミ	自己効力感		○	○
ソ，タ	環境		○	
	リスク行動	○	○	○

（※）情報提供ホームページは，コミュニティ・レベル手法の啓発形態とも考えられるが，情報パンフレットが様々な店舗やイベントで配布されるのに比較して，個人で情報入手を試みるホームページの性格から個人レベルの啓発形態とした。

表2 本介入の全体構成

レベル	札幌	東京近郊	松山
個人	自己チェック・シート札幌版	自己チェック・シート関東版	自己チェック・シート松山版
	電話相談		
	WEBサイト		
小グループ	ワークショップ=4回	ワークショップ=4回	ワークショップ=4回
コミュニティ	情報パンフレット札幌版	情報パンフレット横浜版	情報パンフレット松山版
	地域規模メディア	地域規模メディア	地域規模メディア
	全国規模メディア「広告」4回シリーズ		

表3 「LIFEGUARD2002-2003」(本介入版)プログラム部・企画構成

構成内容		啓発領域	
1部	おしゃべりルーレット	—	—
2部	ミニ・レクチャー	(ク) 行動変容の意図	(イ、エ) 知識、行為知識
3部	コンドームランキング	(コ) 魅力・快感	(サ) コンドーム抵抗感
4部	クローズアップ Gay Sex	(コ) 魅力・快感	(セ) 周囲規範
5部	使えるテクニックとハウツー・シェアリング	(セ) 周囲規範	(ソ、タ) 環境
		(ト、ナ) 主張スキル	(ミ) 自己効力感

表4 「LIFEGUARD2002-2003」(本介入版)プログラムの影響評価

領域	項目	プレ(n=227)		ポスト(n=209)		フォロー(n=128)	
		n	平均	n	平均	n	平均
感染体液知識	血液	227	0.94	209	0.97	128	1.00**
	汗	227	1.00	209	0.99	128	1.00
	膣分泌液	227	0.77	209	0.94***	128	0.94***
	だ液	227	0.87	209	0.98***	128	0.96**
	精液	227	0.94	209	0.97	128	0.99*
	涙	227	0.99	209	0.99	128	1.00
感染身体部位知識	肛門	227	0.99	209	0.97	128	0.97
	へそ	227	0.99	209	0.99	128	1.00
	尿道	227	0.70	209	0.90***	128	0.94***
	口の中	227	0.76	209	0.81	128	0.79
	亀頭	227	0.66	209	0.78*	128	0.78*
感染行為知識	ディープキス	227	0.89	209	0.97***	128	0.97***
	コンドームをつけずに口内射精される	227	0.89	209	0.93	128	0.96*
	コンドームをつけないペニスをなめる	227	0.63	209	0.70	128	0.66
	コンドームをつけずにペニスをなめられる	227	0.63	209	0.82***	128	0.90***
	コンドームをつけずにアナルに射精される	227	0.97	209	0.97	128	0.98
	コンドームをつけずにアナルにペニスを入れる	227	0.80	209	0.85	128	0.87
イメージ	コンドームを使ったセックスはHな感じがする	201	2.43	200	3.01***	125	2.71†
	セイファーセックスは気持ちよい	202	2.98	200	3.39***	125	3.31*
	セイファーセックスはやりかたが決っていない	197	3.41	198	4.14***	125	4.07***
スキル	フェラチオでHIV感染を避ける方法を知っている	203	1.34	199	2.10***	126	2.06***
	相手のコンドームなしのアナルセックスを止める方法を知っている	201	1.62	200	2.18***	126	2.15***
自己効力感	相手の口内射精を避けることができる	202	2.35	199	2.56**	126	2.52†
	アナルセックスの時にコンドームを使うことができる	202	2.48	199	2.68**	126	2.70**
リスク行動	アナルにペニスを入れるときコンドームを使わなかった	200	1.51			80	1.25*
	アナルにペニスを入れられるときコンドームを使わなかった	200	1.58			79	1.28**
	口内射精をした	200	2.01			80	1.46***
	口内射精をされた	201	1.75			80	1.35***

*** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$, † $p<0.10$

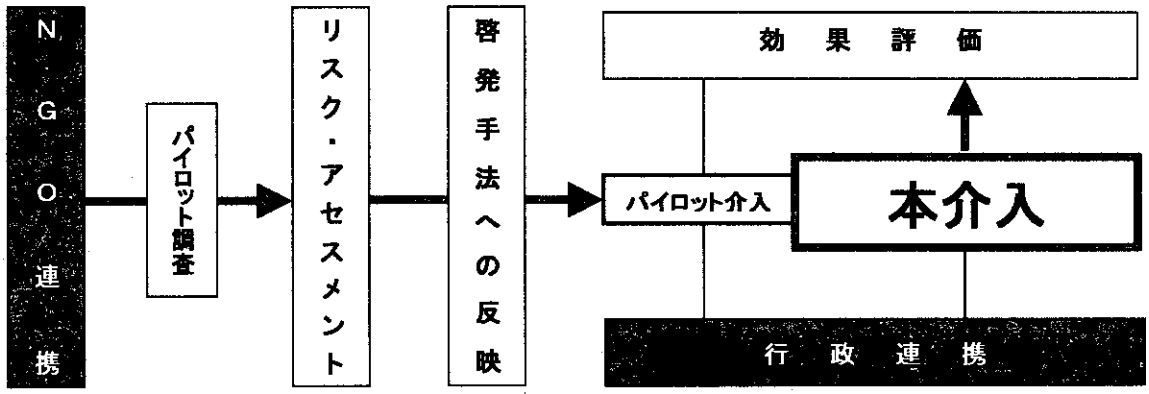
1)「感染体液・感染身体部位・感染行為についての知識」は、正答=1、誤答=0 とした。

2)「リスク行動」「スキル」「自己効力感」は4点式リカートスケールを用いた。

3)「予防イメージ」は6点式リカートスケールを用いた。

Ⅱ．分担研究報告書

研究1：同性愛者等への普及啓発における NGO連携モデルの構築に関する研究



厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書

研究1. 同性愛者等への普及啓発におけるNGO連携モデルの構築に関する研究

分担研究者：柏崎　正雄（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
研究協力者：大石　敏寛（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
風間　　孝（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
菅原　智雄（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
鈴木　　賢（北海道セクシュアル・マイノリティ協会　札幌ミーティング）
冨田美奈子（特定非営利活動法人　レッドリボンさっぽろ）
宮内　典子（特定非営利活動法人　レッドリボンさっぽろ）
木村　秀和（プログレス松山）
河口　和也（広島修道大学）

研究要旨

同性愛者等への普及啓発を実施するうえで、本研究班と各地域のＮＧＯによる連携モデルを構築した。H12 年度に６地域で共同研究のためのプロジェクトを発足させ、H13 年度には調査手法の開発、調査（リスク・アセスメント）の実施、介入環境の整備のためのコミュニティ・エンパワメントを実施した。それらの経緯を踏まえ、H14 年度は北海道（札幌）、東京近郊、四国（松山）の３地域で、３類型（「個人レベル」「小グループ・レベル」「コミュニティ・レベル」）による本介入を実施した。そのさいに、各地のニーズの違い、商業施設数やＮＧＯの規模の違いなどを踏まえ、類型ごとに必要な業務を洗い出し、各地の担い手（ＮＧＯ）が連携することで、共同プロジェクト（プロジェクト OURS）による６つの啓発介入モデル（情報パンフレット、メディア広告、ワークショップ、セルフチェック・シート、電話相談、ホームページ）を各地で実施できた。また、本介入構成の立案、パンフレット・広告の製作、ワークショップの準備・実施、ボランティア・リクルート、アウトリーチ、成果発表会、効果評価のためのグループ・インタビューといった事前・当日・事後の取り組みをＮＧＯ連携モデルによって取り組んだ。さらに、パンフレット製作や地域メディア広告製作など、本介入の一部は３地域の各行政機関との連携のもとに進められ、ＮＧＯと行政機関の連携モデルも構築できた。

A. 研究目的

本研究班の目的は、アプローチが困難な人口層である男性の同性愛者／両性愛者／MSM※（以下、同性愛者等）に対して、普及啓発を合理的に行うための最も効果的な事業体制について、ＮＧＯ間のネットワーク機能と行政サービスとの連携によって実践事例を検証しながら研究・提言する